

「松陰の勉強ぶり」

松陰が、下田密航の失敗によって萩の「野山獄」に収監されてからの14か月間に、618冊もの大量の読書をしたのは有名な話であるが、これとても、兄梅太郎の協力があるからこそである。連日のように弟の獄を訪問し、希望する本を届けてやった兄弟愛は美しい。そのこともあってか、松陰は「三余説」を著して自分の読書欲のあり方をここで云っている。獄中で余暇がたくさんあるのを、無駄にすべきでないと考える松陰であった。短文であるが、原文を下記する。

「三 余 説」

(野山獄文稿) 全集第二巻収載 316 頁安政二年(一八五五) 四月二日

昔薰遇謂へり、「書を読むは当に三余を以てすべし。冬は歳の余なり。夜は日の余なり。陰雨は時の余なり」と。然れども歳にこれ冬あり、日にこれ夜あり、時にこれ雨あるは、皆天道の常にして、未だ以て、余と為すに足らざるなり。吾れ獄に入りて来、亦三余を得て以て書を読めり。謂へらく、已に義を忠孝に失えども、尚ほ食を家国に仰ぐ。

是れ君父の余恩に非ずや。已に身陰房に幽せられ、尚ほ照を戸隙より取る。是れ日月の余光に非ずや。性已に狂悖(きょうはい)にして多く大典を犯し、質又佺弱(おうじゃく)にして数々篤疾に罹る。ここに一もあらば、皆以て身を殺すに足れり。而るに方且に余恩を仰ぎ、余光を取る。是れ人生の余命に非ずやと。凡そ此の三余は皆薰遇にこれなき所にして、吾れ独り之れを得たれば、身を没すと雖も足れり。

抑々薰遇は或いは農となり、或いは官となり、徒だ其の三余を得るのみにて、尚ほ以て天下後世に伝ふるに足れり。況んや吾れは我が三余を得たるをや、寧んぞ量るべけんや。

四月二日

解説(吉田松陰撰集より)

先に三余を書いたのは魏の薰遇である。

かれは、冬と夜と陰雨の三者を三余とした。しかしそれらは自然の常であって「余」ではないと松陰は考える。ところが今、獄中にある自分に与えられている、余恩・余光・余命の三余は、ただ自分だけが得ることの出来るかけがないものである。

それだけに、この三余に対しては感謝しても感謝しきれない思いである。松陰のこのような捉え方こそが、繫獄という逆境にありながらも志気を衰えさせることなく、常に前向きの姿勢を保持し得た要因をなすものである。

[吉田松陰の名文・手紙を読む【目次】ページへ戻る](#)

[吉田松陰.com トップページへ](#)